

随 想

財団設立30周年記念誌

30th

Commemorative magazine



“市民防災”事始め ー空気と水と油ー

市民防災研究所 理事・初代事務局長

岡 島 醇

籾野次郎さんは優れたアイディアマンでした。よくも次から次へと発想が浮かぶものだと感心するばかりでしたが、その発想を執拗に追いつける探究心も無類でした。また発想を形に変えることも得意で、一旦モノづくりを始めると文字通り寝食を忘れて没頭する姿を驚異の眼で見っていました。でも感心ばかりしているわけにはいかず、我々避難研究所のスタッフ(繁さんと技術担当の宮崎さん、小生の3人)は試作品完成の連絡が入れば例え早朝でも休日でも直ちに事務所に入り検討会や実験をする慣わしでした。

連絡が入るたび、今度の試作品は「空気」か「水」かと予想したことを思い出します。

「空気」は防煙フードに代表される煙からの避難器具か、浮き袋のような水難救助器具であり、「水」は初期消火用水袋などの消火のための水と非常用飲料水です。

防煙フードはともかく、消火用水袋の実験となれば絨毯や灯油ストーブなど燃焼物をそろえたり消防署にも連絡したりする段取りが必要ですし、終わればその後片付けも大変で願わくば今度の試作品が「空気」に関するものであるようにと思ったこともありました。

宮城県沖地震(1978年)が発生し、被災された方の体験談で「サラダ油で灯りを作った」ことを知ってからは、従来の研究テーマである「空気」と「水」に「油」が加わりました。

早速食用油を使っでの「灯り」作りが始まり、さらにそのわずかな熱を応用してコンロづくりに挑戦しました。毎日いろんな形状や材料で作ったコンロで炊飯実験が繰り返され、研究所の朝食はもっぱら試作品で炊いたご飯が主でした。

次郎さんが考案作成したものは一見簡単なモノに見えますが、それに到達するまでに形状、材料などで無数の試作と試行錯誤が行われてきました。その真骨頂はまず性能を良くし、それができると作り方や使用方法を単純化して、市民の誰もが使用したり作ったりできるように仕上げることにあります。

このようにして考案したものを市民の方々に知ってもらい、みんなで作って煙からの避難や初期消火の訓練をする。(防煙フードはセロファンで、初期消火用水袋もポリ袋で)それが防災普及の始まりでした。



簗野次郎さんと初代理事長・味岡健二氏

市民防災研究所 元事務局長

細川 顕 司

簗野次郎さんが東京消防庁職員の機関誌『東京消防』に「火災や震災を恐れるみなさんへの提案」と題する文を連載されたのは昭和50年1月号から5月号までで、それが、簗野さんが多くの消防職員に知られる契機になったのですが、それ以前にも、防火や避難に関する様々なアイデアを持って度々東京消防庁消防科学研究所(現・消防技術安全所)に行かれておりました。「避難研究所」として活動されていた頃のことです。

私ごとになりますが、当時、私は『東京消防』の編集を担当しており、簗野さんと初めてお会いしたのは昭和49年の夏だったと記憶しています。

その頃、『東京消防』の企画で、各消防署にお願いして管内の著名な方に「ずいそう」を寄稿していただき、見開きの2ページに掲載しておりましたが、城東消防署から「管内の簗野さんという人に執筆を依頼したが、2ページでは足りないので10ページくらい書かせてくれと言っている」と連絡がありました。どなたにも2ページでお願いしていた企画であり、お一人だけ例外扱いするわけにもいかず、簗野さんと何度かお会いしてお話しをし、紆余曲折の末「ずいそう」とは別扱いで寄稿していただくことになり、冒頭に記した連載に至りました。

1月号では、簗野さんがなぜ防火・防災の研究に取り組んでいるのかに始まって煙からの避難についての考えを書き、2月号では煙からの避難用具として「セロハン防煙フード」(現・SBKけむりフードの原型)とシートを利用した救出法を、3月号では煙からの避難についての図解、4月号では「セロハン防煙フード」「ぬれタオル利用のポイント」など、5月号では濡れシートを利用した避難方法、ポリ袋を使った浮き袋の作り方、避難時の傘の利用法などを「提案」されました。

いま見返してみると、連載3回目では、簗野次郎さんの顔写真と紹介を入れています。これは、当時の編集委員長であった味岡部長(後に消防総監・財団法人市民防災研究所の初代理事長)から「簗野さんとはどのような方かを紹介してはどうか」との指示があつてのことでした。

実は、2月号を発行した直後に味岡部長から「簗野さんってどういう人？」とお訊ねがありました。掲載に至った経緯を説明すると「機会があつたら一度お目にかかりたい」とのことでしたので簗野さんに連絡をとったところ、直ぐに飛んで来てくださって対面が実現しました。当時の本部庁舎は永田町にありましたが、簗野さんが、底の一方を切り取って輪ゴムで止めたポリ袋に水を入れたものを持参され、輪ゴムを外して水を絞り出す初期消火用の水袋を1階のゴミ置き場で実験して見せたのを覚えています。現在の「投てき水パック」の原型でした。

味岡部長は簗野さんの考えに大変興味を持たれ、その後度々簗野さんに会って相談に乗ったり、全国の消防本部を紹介するなどして簗野さんの活動を側面から応援されていました。行政機関としての消防の

手が及ばない範囲のことを、私財を投じて活動されている簗野さんに共感されていたことでした。「避難研究所」時代の簗野さんは、全国からの講演依頼にも講演料はもちろん、交通費も一切受け取らずに出かけていました。

『東京消防』に掲載された当時の「セロハン防煙フード」は「身の回りにあるもので、だれにでも作れるもの」というコンセプトで、それを作って販売するのではなく、自分の命を守るものなのだから自分で作らなければダメというのが簗野さんの考えでした。ですから、セロハンとセロハンテープを使って自分で作れるように図で説明し、それをかぶったときのイラストも添えられていました。

私などは「自分で作れといっても作る人はほとんどいないのだから、完成品を販売する方が普及する」と言っていたのですが、簗野さんは頑として聞き入れてくれませんでした。制作実費で頒布するようになったのは、東京都認可の財団法人になった昭和56年から2年後のことで、それは財団の活動を継続する一助にするためでした。現在でも「SBKけむりフード」はコンスタントに年間2万個ほど頒布されています。

昭和53年に、簗野さんの考えていたことをクニトシロウ氏がマンガ化した『親子防災教室』が毎日新聞社から200万部発行され、新聞の購読者に無料配布されました。この冊子が大変好評で、その後もあちこちから「欲しい」という声があったのですが、無料配布された後は在庫が尽き、希望に応えることができませんでした。その際も“三方一両損”という味岡部長のアイデアで、『まんが避難学入門』として東京消防庁が監修し、大盛印刷株式会社が儲けなしの19円で印刷・製本等を引き受けてくれ、財団法人東京消防協会が20円で販売するという形で冊子が継続して世に出回ることになりました。だれも儲かりはしないシステムを作り、必要な分は簗野さんも20円で購入していました。ちなみに、漫画家のクニトシロウ氏は、当時NHK社会部にいた吉村秀實氏(現・理事)の幼少期から大学まで一緒だった友人で、吉村さんの紹介があってこの冊子が誕生したのです。



簗野の爺さん

元東京消防庁指導広報部長(市民防災研究所 前監事)

有 我 政 彦

私と簗野次郎さんとの出会いは昭和48年厚生課時代、味岡人事部長(当時)からの「災害時の避難についていろいろ研究している人、一緒に相談にのってあげて欲しい」との紹介であった。

その数日後「火事場で逃げる際、煙を吸わないように頭からスッポリかぶる袋を考えた」と市販のセロファン紙をセロテープで貼り合せた45リットルほどの袋状の見本品を持参し、訪ねてこられた。「急ぎこの袋を12,000枚くらい作って、全消防職員に携帯して欲しい」との要望。

無謀な注文であったが、幡ヶ谷家族寮全員に手伝ってもらい、持ち込んだセロファン原反を裁断し1個づつセロテープを貼りつけるという、なんともすごい内職的仕事で、僅か1週間ほどで完成、全消防職員に

携帯してもらう事が出来た。現在市販されている「防煙フード」の原型である。

簗野さんのユニークな発明の数々！その頂点は「投てき水パック」であろう。「防災には素人だ」と本人は謙遜していたが「街のアイデアマン」が思考と実験を重ねて作り上げた素人しか作ることが出来なかった最高傑作であった。

平成8年5月21日「投てき水パック」は日本消防検定協会から「簡易消火補助具」として正式に認定されたが、この間、実に10年余り、認定を受けた日「感無量だ！」と興奮されていた姿が今でも強く印象に残っている。

簗野さんは、幼少時に関東大震災を経験し「地震の恐怖を実感し、震災から身を守る術を広く街の人に知ってほしいと強く思った」と語っておられた。その言葉通り、晩年の30年余り、多くの私財を投じ「生命の尊さ、防災・安全」のために身を粉にして、全神経を注ぎ込み、講演や実演など、全国を行脚した。

私は、簗野さんのことを敬愛を込めて「爺さん」と呼ばせてもらい、爺さんの「世のため人のため」精神を身近に見せていただいた。

残念ながら、平成9年に86歳で鬼籍に入られたが、爺さんは例の調子でニコニコと「この極楽浄土は平和で穏やかではあるが、しかしどこにあっても防災・安全を忘れてはならない」と辻説法をしているのではないだろうか？



「人のつながり」を教えてくれた 市民防災研究所

市民防災研究所 理事

池 上 三 喜 子

初代理事長の味岡健二さんのお声かけで、市民防災研究所(SBK)で仕事をするようになってから、早20年になりました。私がSBKへ出入りしだした平成4年当時は、建物は古かったですが、簗野次郎さん(初代所長)、簗野繁さん(初代副所長)、岡島醇さん(初代事務局長、現理事)、それに事務職の女性が3人(佐藤澄子さん、塚田敦子さん、笹本利子さん)いて、男女のバランスがちょうど良い研究所でした。世間では最近になって、「男女共同参画」とか、「女性の視点で防災を考える」などと言っていますが、SBKでは、とっくに男女共同参画で防災を考えていたことになります。

そんな中に私を入れていただいたのですから、居心地がいいに決まっています。次郎さん、繁さん、岡島さんの講演には同行させていただいたり、庭にあった実験小屋で次郎さん発案の投てき水パックによる初期消火実験をしたり、卓上コンロ、灯り作りなどを何回したとか、今思えば、なんと贅沢な教えを受けたことかと感謝の気持ちでいっぱいです。

忘れられないのが、毎年お世話になった方々をお招きして分室で開かれるとんかつパーティーです。

次郎さんが揚げる分厚いとんかつはSBK名物になりました。美味しい肉を吟味して電話で注文するのは、いつも繁さんの役目。その肉や、もろもろの材料を買ったり、とんかつ以外の料理を調理するのは女性陣の役割でした。パーティー当日は、朝から分室へ直行し、塚田さんを中心にみんなで料理を作ったものです。前日までに、出席者分の机と座布団を用意するのはいつも笹本さんでした。

ある年、早朝からの防災訓練に参加するため私は分室に一人で泊まったことがありました。夕食を済ませて分室へ行くと、笹本さんが敷いてくれた布団と、机の上には塚田さんが書いたメモがありました。それには冷蔵庫に冷たい飲み物(今晚用と明日の訓練用)が入っているのだから飲むように、また、朝起こして欲しかったら電話をするようにと書いてあったように記憶しています。なんと親切な振る舞いができるお二人なのかと感激したことを覚えています。このように自分が受けてうれしかったことは、他の人にもおすそ分けしようと思っています。人のつながりが大事なことを教えてくれたのがSBKでした。



SBKと私

市民防災研究所 元主任研究員

青野文江

市民防災研究所設立30周年、おめでとうございます。この度の記念誌発刊によせて、私がお世話になった10年間を振り返ってみると、まず思い出されるのは、初めてSBKを訪ねた際の事務所の明るい雰囲気です。緊張していた私に、優しい口調で話しかけてくれた籾野繁さんをはじめ、岡島さんや塚田さん、池上さんが温かく迎えてくれました。昼には次郎さんも交えて、空き缶コンロで炊いた美味しいご飯をご馳走になりました。笑いの絶えない賑やかなランチは、就職活動だったことを忘れてしまうほどでした。私が次郎さんにお会いしたのは、この一度きりでしたが、もっと前から出会っていたような錯覚をするほど、たくさんの方々から次郎さんとの思い出話をお聞きしました。信じられないくらい、とてつもなく情熱的な方だったことを知りました。

次郎さん、繁さんと相次いで亡くなり、残されたスタッフで再スタートしたのが私の1年目でした。この危機的状況でありながら、岡島さんや池上さんの講演に何度も同行させていただいたほか、被災者インタビュー研究など、新人の私に多くの経験をさせて下さいました。内閣府の調査研究とボランティア行事運営の受託や、米国での研修会、国内外問わず災害現地調査ができたことに心から感謝しています。時には、やり甲斐があり過ぎるほどの業務もありましたが、何より有り難く感じているのは、毎年必ず心に残る素晴らしい人と知り合えたことでした。ビジネスを超えてつながり続けたい魅力的な方々との出会いが、働き続けられた最大の原動力でした。

入所4年目に20周年事業を行ってから早10年。いつの時代も、数少ない事務所スタッフを支えてくれて

いるのは、数多くの応援者です。「次郎さんや繁さんによくしてもらったから、今度は恩返しする番だ」と言って、私にご指導、ご助言、ご馳走をして下さった方がたくさんいました。これまで同様変わらぬご支援をお願いすると共に、市民防災の普及と研究所の益々のご発展をお祈りいたします。



SBK in HIROSHIMA (市民防災研修会)

オフィス・セオリー

瀬尾理

もう20年ほど昔になるだろうか。その年の市民防災研究所、定例研修会は広島県宮島町だった。宮島町、むろん厳島神社が鎮座するあの町である。平家ゆかりの歴史的観光地のほかに、この島の背骨を成す弥山(みせん)は、往昔からの自然森林(保護林)をもつこと。これが意外に知られていない。

この弥山から流れ落ちる水の通路を紅葉谷という。深い森林が受ける大量の雨水を受ける排水溝の役目を負うが、ある年に降った超豪雨はこの可憐な溪谷を濁流で翻弄し蹂躪した。巨大な岩石もあわせて流したから、谷沿いの地形まで変えるほどの被害が出た。

国立公園、日本三景そして今や世界遺産の名所ゆえ、この島全体が厳しい自然保護法によって新たな“手入れ”は原則タブーとなっていた。この法律をクリアしながら溪谷およびその周辺が整備されていったのであるが、これには長い月日と経費がかかった。壮大な土木工事になったのは当然である。

宮島はこの災害以外でも、幾度となく風水害にやられている。何よりも、海中に立つ神社の結構だから、強烈な風と波浪には抗しきれない側面をもつ。こういう悪条件を承知の上で、あえて世界でも稀な建造物をつくった古の日本人の覚悟とは何であったか。これを参加者に改めて考えさせた貴重な研修会だった。

断っておくが、宮島町に宿泊して瀬戸内の美味に感動したとか、紅葉饅頭を食べ過ぎたとか、翌日自由時間に広島市内で、広島焼きをたらふく頬張ったとか、その圧倒的多数は女性参加者だったとか。ことごとく自白するつもりはない。ひたすら感心したり、感動したりの研究会であったこと、それを今でも鮮明に覚えている。

SBKの定例研修会は、だからとってもタメになるのだ。

対 談 財団設立時の生活安全課長 藤田眞一さんに聞く

藤田 眞一(元東京消防庁生活安全課長) × 岡島 醇(市民防災研究所理事・初代事務局長)



岡島 藤田さんが生活安全課長に着任されたのは、市民防災研究所が発足した同じ年の昭和56年8月だと記憶しております。

藤田 そうですね。その2、3日後に、簗野次郎さんと岡島さんが生活安全課を訪れ、お会いしました。

岡島 財団設立の諸手続きが終わりましたと言ってお伺いしました。しかし、市民防災研究所は東京消防庁のみなさんに理解されていたかと言うと、私は必ずしもそうだとは思われませんでした。

藤田 おっしゃったように、必ずしも東京消防庁は理解していたわけではないと思いますが、逆に言うと市民防災研究所が東京消防庁に何を期待しているのか、どう協力すればよいのか考えました。

簗野さんは私財を使って防災の研究をして、一生懸命に都民に防災知識を普及しようとしていることから、東京消防庁も大いに協力すべきことだと思いました。

ときに、私の耳に望ましくないことも入りましたがお互い協力しながら研究することについてはシビアに話し合いました。もう一つ市民防災研究所に言ってきたことは、簗野さんが発明された防災用品等は特許、実用新案も取らず全くのフリーで誰でも利用、活用ができるものでした。簗野さんの考えは誰が使用しても、また誰が同じような品を作成しても防災行動力があがればよいと考えていました。ところが、当時話題になっていた防煙フードや消火フラワーの偽物、粗悪品がたくさん出回りました。偽物、粗悪品をなくす意味からも、特許、実用新案の許諾を取り、また、財団の財政基盤を確保する必要性を強く望みました。簗野さんがまいた種はよくも悪くも、責任を持って刈り取ることが大切であると。

また、当時の中條指導広報部長の勧めもあり、市民防災研究所と東京消防庁消防科学研究所(現消防技術安全所)とでコラボで色々研究をしてきました。

岡島 消防科学研究所とは、天ぷら油火災の消火実験やシーツ等濡れた布で火をどのように消せるのか実験をしました。

藤田 簗野さんはアイデアマンでいろいろな実験をされるけど、市民防災研究所がある工場の敷地内での実験規模では、実際の火災に比べ小さなものでスケールやエネルギーが違います。この方法で火が消えるよと言っても条件をつけなければいけません。例えば、濡れシーツで石油ストーブの火が消えると言っても、初期の段階であれば火は消えるのですが、炎が天井に達していたら濡れシーツでは火は消えません。そういうことも想定して何をやるかが大切です。

岡島 藤田さんは「客観的なデータをとり、みんなが納得するような研究をした方がいい」と簗野次郎に助言をしてくれました。工場の敷地内だけの小規模な実験だけではなく、消防科学研究所と一緒に実験をすれば、もっと全体が見えてくるという意味だったのですね。

藤田 消防側も理論だけでなく、これを機に本格的に実験を通して天ぷら油火災の実態解明に努めることとしました。

さらに大規模な実験をするために、大阪で実際の建物を使った火災実験をしました。

岡島 そうですね。大阪府茨木市内の解体前の5階建て集合住宅で火災実験をしました。

藤田 その時、私も生活安全課員と一緒に見学に行きました。警防部長も行って、あの時、放水器具「フォグガン」の開発実験も行い実用化に寄与しました。

私は、役所的な発想ではなく、タイミングや民間の考えを入れ、あるいは商業ベース的方法で考えました。それは、私の親が商人だったということも影響していると思います。

岡島 藤田さんは、机に座って仕事をしているだけではなく、実験をすると聞けば作業服に着替え課員を連れて行く行動的な課長さんでした。その行動が、簗野次郎の心に触れ、藤田さんに心を許し、気が合ったのだと思います。

藤田 簗野さんは、自分を偉ぶらない人でした。葉山にある私の自宅へ2度いらしたことがありました。1度目は私が駅まで迎えに行き、御用邸などをまわり観光して帰ることになりましたが、駅でグリーン券を買って渡すと「私はグリーン車には乗りません」ときっぱり断りました。そのとき、おごることがない人だなとつくづく思いました。2度目は私に黙って来てちょうど留守でしたので、持ってきたとんかつを郵便受けに入れて帰ったようでした。後で電話をすると「会いたくて、とんかつを揚げて行ったんだよ」と言っていました。

岡島 市民防災研究所が藤田さんから受けた影響で一番大きかったことは、天ぷら油火災の消火実験を通じて、消火具などの物品を販売することではなく、初期消火の方法などソフト対策を普及させるという考え方だったと思います。

藤田 初めは、テレビ出演している簗野さんが何をしている人だろうと思っていました。東京消防庁に来たときには、総監や部長に私から誘導して会ってもらいました。それは大きな効果をあげました。簗野さんの話で総監や部長が耳を傾ける。簗野さんも勉強になるところは多くあったと思います。

岡島 天ぷら油火災の消火実験だけにとどまらず、初期消火法を普及させるために映画まで制作しました。あの映画はベストセラーになり、財団の経済的な自立のきっかけになりました。当時は16ミリフィルムで、映画の制作会社がコンテストに応募し、入選しました。このことと、全国の消防機関が天ぷら油火災が多く発生している現状に悩んでいたことが重なり、映画が爆発的に売れました。市民防災研究所で最初に売れたのは、天ぷら油火災の初期消火法でした。これは、東京消防庁のお墨付きがあったからこそで、それがなければ売れなかったかもしれません。



座談会 「市民防災研究所の創世記を語る」

●左から

吉村 秀實

(市民防災研究所理事)

×

村上 處直

(市民防災研究所監事・財団設立発起人)

×

岡島 醇

(市民防災研究所理事・初代事務局長)



■ 簗野親子との出会い

吉村 NHKの記者時代、昭和44年に東京に転勤になり、東京消防庁の記者クラブに入って間もなくして消防の人から簗野次郎さんのことを聞きました。当時、自分の身銭を切ってまで防災の仕事をしていることが東京消防庁の人からすると信じられなかったようです。私に「簗野次郎っていう人がいるけれど、いつ衣の下から鎧がのぞくかわからない。会わない方がいい」と言われました。

その後、昭和50年に、東京大学の近くの寿司屋で、村上先生たちが宴会をしていて、そこで簗野繁さんを紹介されました。繁さんとの出会いは今も忘れもしません。

村上 私は城東消防署から講演を頼まれ、講演会が終わったときに署長さんが背の低い面白そうなおじさんを連れてきました。それが簗野次郎さんでした。その時は、名刺交換して、どんなことをやっているかを聞きました。

その後、ヨーロッパの防災ツアーを企画したとき、あまりにも参加者が少なく朝日新聞の知り合い記者に囲み記事を書いてもらいました。その記事を見た次郎さんから「うちの息子をツアーに連れて行って欲



しい」と頼まれ、繁さんがツアーに参加しました。

岡島 繁さんがヨーロッパの防災ツアーに参加したことがきっかけで、中田金市先生や難波桂芳先生たちが次郎さんのことを知ることになりました。

■ 現場に学ぶ姿勢と市民目線の防災

吉村 繁さんはちよくちよく災害現場に来られましたが、一度だけ次郎さんと現場に行ったことがあります。昭和51年12月26日に発生した静岡県沼津市内の「らくらく酒場」の火災現場です。私は年末年始休暇に入っていましたが、朝早く横浜市内の自宅まで迎え来られて少々まいったことがありました。しかし、やはり現場は取材の宝庫ですから、大変勉強になりました。取材記者は、休暇だからと言って怠けてはいけませんね。

村上 私も災害現場に行くときは、だいたい繁さんもついて来ました。国内の災害だけでなく、セントヘレンズ噴火災害やグアテマラ地震など外国で起きた災害にも一緒に行きましたよ。

岡島 繁さんは、村上先生のおかげで各地の災害現場に行っています。

吉村 簗野親子との出会いで私が一番勉強になったのは、市民の目線で常に防災を見ていたという事です。従来から、火災だとか防災だと言うと、行政が主導していて、行政の言うことを聞いていれば良いという話になっていたけれど、安全対策にはお金が掛かる訳です。例えば、消火器一つをとってみても、結構値段の高いものですから、全ての人たちが消火器を備えられないわけです。そうすると、簗野さん親子は、ポリ袋に入った水袋でも初期消火には結構役に立ちますよとか、濡れたシーツをかぶせれば、火が消えますよと提案してくれます。つまり、市民の目線で防災を考えるとという事では、出色の親子だったと思っています。

岡島 私もそう思います。避難研究所から財団の設立に至るまでの間ってというのは、こんな研究熱心な人はいないって言うくらい、次郎さんは四六時中研究をしていました。

次郎さんのアイデアを受けて試作するのは技術担当の宮崎さんでした。次郎さんは思いついたアイデアを宮崎さんに伝え、それからすぐに東京消防庁などに話に行き、様々な人からアドバイスをもらいます。そうすると、帰りの中で当初のアイデアが変わってしまうので、せっかく試作した物が全て台無しということもたびたびありました。宮崎さんは悔しそうでしたけど、次から次へとアイデアが生まれました。それらのアイデアは、市民が身近にある物で誰でもできることが根底にあったように思います。

吉村 そういった面では、すごく勉強になりました。ただ残念なのは、当時の行政側の目線では「素人に何ができるか」という事で、行政側は、簗野さん達の提案をなかなか受け入れようとはしませんでした。

■ 簗野次郎さんの功績－宮城県泉市林野火災から住宅地への延焼を防ぐ

吉村 菊地雄一郎さんは、元々は宮城県警の捜査1課長で、定年退職して泉市消防本部の消防長になった



人です。菊池さんは従来の慣習などにとらわれることなく本当の市民目線を持った消防長でした。簗野次郎さんの考え方にたちまち感銘を受けて、市民のための防災はこれだという事で、避難訓練から消火訓練、各家庭に水袋を備えることまで、次郎さんの指導でずっとやって来ました。

昭和58年、全国的にフェーン現象の影響によって、全国27カ所で山火事が起きました。泉市でも山火事が起き、住宅地に火が迫って来ました。隣町は住民全員を安全な場所へ避難させましたが、一方の泉市は、菊池消防長が住民たちを避難させず、それまで教えられた通りのバケツリレーなどで消火作業を指示したため、住宅地への延焼は免れました。隣町は避難してしまったために、住宅地は丸焼けになり、後日、消防機関が住民に訴えられたという話も聞きました。「逃げることはない。今まで訓練した通りやれば『町は救える』『家は救える』」って叱咤激励したのが、菊池雄一郎さんと部下の阿部幸雄さんでした。阿部幸雄さんは、その後、登米の消防署長になりましたが、既に故人です。当時の泉市消防本部は凄かったです。

岡島 消防職員も地域住民も一体となって延焼を防ぎました。次郎さんの実践普及が成果を上げた事例の一つだと思います。

■ 東日本大震災から反省し出直しを

吉村 今回の東日本大震災で、日本の地震学会をはじめ、防災に関わる全ての世界が反省しなければなりません。この市民防災研究所も、これまで市民に訴え、指導して来た防災対策、避難対策などに誤りがなかったかどうか、全て検証しなければなりません。一から出直しだと思います。例えば「地震だ、火を消せ」という指導ですが、こんなことは何年も前からおかしいと言われ続けて来たのに、東京消防庁ではずっと言い続けて来ました。当然なことですが、「地震だ、まず身の安全」ということが一番大事なことです。東日本大震災をあらゆるところから検証して、今まで私たちがどのように市民に指導して来たのか、もちろんマスコミも反省し、出直しが必要です。検証して反省し、簗野さん親子が提唱して来た「市民目線の防災」にもう一度たちかえるべきだと思っています。

岡島 次郎さんに財団の業務が大変でと少しでも言い訳をしたら、もの凄く怒られました。私たちの仕事は「人の命を一人でも救うこと」で、それに全力あげるべきなのに、もし財団運営のことで研究や普及活動に手が取れないのであれば、財団をやめたっていいと怒られたことが今でも非常に印象に残っています。それぐらい人の命を大事にしてきました。そこから発想してきた原点を忘れてはいけませんね。